相澤伸幸（あいざわ のぶ ゆき）

学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	教博 第 53 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期3年の課程） 教育学専攻
学位論文題目	ニーチェと人間形成論 ー近代ドイツの教育学的人間形成論の系譜においてー
論文審査委員	（主査） 助教授 笹田博通　教授 生田久美子 教授 加藤守通 助教授 池尾恭一

論文内容の要旨

本論文は人間形成をめぐるニーチェの思想をその生命論・生理学・認識論に定位して究明するとともに、これを近代ドイツ精神史、とりわけヘルダーやゲーテの人間形成論に照らして吟味することによって、ニーチェの人間形成観の有する特質を多角的・重層的に解明しようとしたものである。すなわち、(1) ニーチェの人間形成論の基礎をその生命論・生理学・認識論のうちに探究すること、(2) ニーチェに到る人間形成論の歴史をヘルダーやゲーテの思想において確認すること、(3) それらの作業をふまえてニーチェの人間形成観の特質を具体的に検証していくこと、の三つの点が主な目的として立てられている。その内容は以下のとおりである。

本論文は序論と7章から構成されている。まず、本研究での目的及び構成が序論において提示されたのち、第1章「ニーチェの生命論と人間形成論」では、ニーチェの生命観への考究がその人間形成論の理解にとって重要であるとの仮説に基づいて、生命をめぐるニーチェの視点が、「肉体」・「生成」・「力への意志」・「永遠回帰」等の側面から多角的に考察され、そこから、生命に対するニーチェの基本姿勢とそれに伴う思想上のアポリアについて検討される。そして、ニーチェの生命論の人間形成論的な意義をその思想圏からのみ解明することは不可能である、と主張され

る。

第2章及び第3章は、第1章で扱われた生命論と並んでニーチェの人間形成論の基礎をなす生理学及び認識論について考察している。まず、第2章「ニーチェの生理学と人間形成論」では、ニーチェの生理学の人間形成論的な意義が主題として取り上げられ、不明瞭な側面を有するニーチェの生理学が、その科学史的・精神史的な背景に関する探査をとおして、また歴史的に歪曲されていった経緯への反省に基づいて、人間形成論的に検討される。次いで、第3章「ニーチェの認識論と人間形成論」では、ニーチェの認識論とその人間形成論的な意義へと焦点が合わせられ、認識をめぐるニーチェの所論の基本性格が、従来のニーチェ解釈をもふまえたうえで人間形成論的に析出される。

第4章及び第5章は、第3章までの考察をとおして描出されたニーチェの人間形成論をヘルダーやゲーテのそれと比較考量している。論者によると、ニーチェはヘルダー・ゲーテ以降の近代ドイツ精神史の思潮を批判的に継承しており、したがってその人間形成論は、ヘルダーやゲーテの思想に照らすことでより明確に理解しうるものとなるはずである。

こうした仮説に基づいて、まず、第4章「ヘルダーの人間形成論とニーチェへの距離」では、十八世紀ドイツの人間形成論がいかなる経緯において成立したのか、という問題について、いわゆる「進歩」概念の展開課程を視野に入れることによって考察され、そこから、近代のビルドゥング思想の創始者とでもいうべきヘルダーの人間形成論が検討される。そして、その人間形成論が当時の博物学的思想と密接に連携したものであることが指摘される。次いで、第5章「ゲーテの人間形成論とニーチェへの継承」では、いわばヘルダーの人間形成論の後継者であるゲーテが取り上げられ、その人間形成論の基本性格が、とりわけ「自己産出」というゲーテ自然学の理論に定位して析出される。そして、ヘルダーやゲーテの時代以降の人間形成論の歴史をも参照しながら、ニーチェとゲーテとは人間形成論にみていかに連関しているのか、またそうした連関はいかなる方法に基づいて読み取られうるものか、という問題について考察される。

第6章及び第7章は、これまでの一連の考察をふまえてニーチェの人間形成観の特質を具体的に検証していくことを目的としている。まず、第6章「初期ニーチェの教師論」では、ニーチェの人間形成観と密接に連携した教師論がとりわけ初期の思想圏のうちに探究される。次いで、第7章「『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの人間形成観」では、教育哲学におけるニーチェ受容の経緯が確認されたのち、主著『ツァラトゥストラ』の示す人間形成観が主題として取り上げられ、精神の「三段変化」と呼ばれる教説に定位して、人間形成又は自己形成をめぐるニーチェの思想が詳細に検討される。そして、三段変化の教説のなかで語られる「幼子」とは柔軟で多様な形成可能性を含意しているが、そうした性格は基本的には「超人」についても当てはまるものであって、ニーチェは幼子や超人を何らかの実体としてではなくいわば無条件・無時間・無目的の

存在として捉えている、と主張され、これによってニーチェの人間形成観の有する特質が明らかにされる。

論文審査の結果の要旨

中世神秘主義にその淵源を有するビルドゥングという概念は、十八世紀の人文主義において新たな規定を獲得し、カントからヘーゲルに到る過程で完成されたものである。それはもともと自然的形成、すなわち自然によって生み出された形態の意味で用いられていたが、そうした意味から発展して、自己の素質や能力を作り上げる人間固有のあり方を指すようになり、そこからさらに一種の歴史的な意味合いさえ帯びていくことになる。このビルドゥングは近代ドイツ教育学においてきわめて重要な問題であったといえる。本論文は、人間形成論のこのような展開をふまえながら、十八世紀の人間形成論の批判的継承としてニーチェを理解し、その源流をなすヘルダーやゲーテの思想へと立ち返ることで、ニーチェの人間形成観を近代ドイツ精神史のうちに究明し、これによって人間形成論研究の新たな可能性を提示している。その射程は、人間形成をめぐるニーチェの思想にかかわるさまざまな学問領域、すなわち生命論、生理学、認識論といったきわめて広汎な領域にわたるものである。

こうした研究は、これまでの教育哲学研究には見られない独創性を有している。教育学、とりわけ人間形成論に対するニーチェの思想の意義については、わが国においてはもちろん、ドイツでもいまだ原理的・全体的には十分に研究されていないのが実情であり、この点で本論文は、教育哲学研究に対して多大な貢献をなすものであるといえる。

さて、本論文がそうであるように、思想史的・精神史的な視点に立って人間形成論研究を行っていく場合、回避されねばならないのは、或る思想家の人間形成観を他の思想家のそれと表面的に比較考量する、ということである。論者はみずからの人間形成論研究においてこのやり方に陥らないよう努めてはいるが、しかし、たとえばニーチェの人間形成論とゲーテのそれとを比較検討するさい、前者のアポリアを後者によって解決しようとするなど、思想連関に対する論者のやや独断的で短絡的な見方が働いている点も否定できない。こうした問題があるとはいえ、ニーチェの諸著作及び膨大な関連文献を精緻に探査・読解し、その人間形成観の特質を多角的・重層的に解明した本論文は、全体としてみるならばきわめて意欲的な研究であるといえる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。